宇宙から学ぶ、木から学ぶ
― 私達の地球・自然・生命

小惑星探査機はやぶさの出発から帰還までを見送り、その物語を日本中に語る宇宙博士の的川先生。
宮大工の棟梁としてもの作りに生涯をかけ、多くの弟子を育ててこられた小川棟梁。
師匠の思い出から教育への思いまで、日本の未来を担う子供たち、育てる両親たちへのメッセージ。

的川泰宣　×　小川三夫

宇宙工学者　宮大工

日々の生活のなかで、正しい触れ合いを大切にする

的川　小惑星イトカワの名前は、私の師匠であった「日本のロケットの父」といわれた糸川英夫博士の名前にちなんでいます。小川さんの棟梁は、棟梁の棟梁だから大棟梁かな。どのような思い出がありますか。

小川　私の棟梁であった西岡常一棟梁は、「法隆寺に鬼が居る」といわれるぐらい、怖い人だったらしいですね。しかし、弟子が怖がって離れていたら技術を学ぶことはできません。その人になりきるぐらいにピタッと寄り添うことができないといけない。そのように寄り添ってしまえば、自分も鬼になったようなものですから、べつに怖くないですよね。

西岡棟梁は、自分に厳しい人でした。厳しく生きた人が感じ得た、ほんとうの優しさというものを持っていた人でした。厳しさのない優しさは甘えにつながってしまいますね。

的川　私は一度、棟梁の工房におじゃまして、泊めていただいたことがありますが、弟子の皆さんと一緒に暮らしていらっしゃるんですね。

小川　自分のところでは、みんなして寝泊まりしています。大きい建物の仕事では、大きい木を動かします。木は重いですよね。そういうものを動かして建物を作るのに、長い時間がかかります。その長い時間にうちひしがれそうになることが、度々あります。しかし、同じところに寝て、同じ飯を食べて、同じ空気を吸って、同じ目的をもって、毎日みんなで営んでいるわけです。そうすると、最後の頃はもう言葉を使うことがいらないですね。ものを持つにしても、力がある子が重い方をスッと持ちます。みんなして生活しているから、この子はそれがはっきりとわかる。一番大切なことは、正しい触れ合いをしていなくちゃあかんですね。触れ合いがたくさんなくては、そういうことは気づけませんものね。

日本を担う子供たちを育てる鍵となるのは、お母さん

的川　はやぶさが帰ってくる少し前に、NHK のテレビ番組に出ました。「はやぶさの成功の理由を一つだけあげるとしたら何か」と問われたので、「適当に貧乏だったからだ」と、答えました。余分なお金はないので、外部のメーカーに仕事を頼んだりはできません。かなりのことを自分たちで設計段階からやることになる。すると、打ち上げた後に何か問題が出てきても、数人の幹部が集まるとほとんどのことがわかります。はやぶさが幾度の危機にも奇跡的に立ち直ってきた経過を見てみると、その「適当に貧乏」だったことがとても効いていると感じます。

「お金があると、もっと立派な探査機を作れるから、いろいろな問題は起きなかっただろう」と、言われることもあります。私は「それは違うなあ」と。作るときの気合いの入れ方で、その後の運びや処理がまったく違ってくる、という感じがしています。このことは、地球の未来を考えても、これからの

日本を私たちが子どもたちにどう託していけるかにも、たいへんつながりのあることではないか、と思っています。

小川さんは、子供やそのお父さんやお母さんに、どのような思いやメッセージをお持ちですか。

小川　弟子に思うことは、執念のもの作りを教えなくてはだめだということですな。工作技術で作れば、できればそれでよしとするわけです。でも、執念のもの作りをする子は、できあがったものに何かしらの不満が残る。その不満がもっとやる気を起すわけです。しかし、執念のもの作りは教えることができない。これは本人が感じることだからです。

これまで何十年もやってきて思うことは、執念のもの作りをするような子を育てるのなら、日常生活が厳しく、厳しく、辛く、辛くあればあるほど、執念のもの作りに気づく。甘い生活をしていたら、絶対に執念のもの作りには気づかん。工作技術だけで終わってしまうと思います。

的川　器用にものを作ることを教えるのではない、ということですか。

小川　そうですね。日常生活が厳しく苦しくあればあるほど、執念のもの作りを思う。それこそ、貧乏で道具が買えなければ、自分で自然に作ります。最初から電気道具を買って与えれば、それだけしか使えない。

的川　やっぱり、生活のどこかに欠乏感や貧乏のようなものをしっかりと残しておかなくてはならない。

小川　はい、残しておかなければなりませんね。そして家庭では正しい触れ合いをしておくということでしょうな。今の母親が子供からうるさがられるのは、子供が知っていることを言うからでね。子供が知っていることは言わなくていい。その子が失敗しそうだというところだけ、先にチョコッと言うぐらいで、いいんじゃないでしょうか。それが正しい触れ合いじゃないか、と思いますね。

的川　いま子供を育てるには、学校や教師のあり方などがずいぶん社会問題になっていますけれど、この問題解決の鍵は家庭にある。とくにお母さんが鍵を握っているように思いますね。厳しさだけではなくて、人間の触れ合いという心の問題をいちばん教えられるのも、やはり母親だろうと感じます。

自然や宇宙に生命を感じられる日本人らしさを生かしたい

的川　日本人というのは、生命に敏感な民族で、小川さんのおっしゃるように木にも生命を感じるし、山にも生命を感じることができる。宇宙も地球も自然も含めた、そういうものの感じ方を取り戻せるような国になっていくといいと感じています。

二十世紀は、経済力と軍事力が優れた国が威張り散らしていた時代でした。日本の経済などもこれからどんどんアジアの諸国に抜かれていくことでしょう。そんな未来で、私たちが一番誇らしく思うのはやはり、日本の文化。小川さんたちが作られている、ほんとうに日本にしかないものだと思います。そういうものを大事にする国。お金はないけれども、そういう社会ができることが大事だと私は思っています。私はそこに、自然や生命や宇宙というものの存在が大きいのではないか、と勝手ながら考えているわけです。

小川　今日は、千二百年前の古木を削って、皆さんに香りを感じてもらいましたね。木は生きているんです。私はそれを法隆寺で学びました。そうすると「小川さんに作ってもらうと千三百年持ちますね」と言われるんですが、そんなには持ちません。

法隆寺は偶然にもったような感じなので、自分たちが作っているようなものは、まあ、三百年ぐらい経つと大修理をしなくてはならない。基礎に使うコンクリートはそこらでダメになると思います。でも、そのときには上に持ち上げたり、解体したりして、基礎をし直せばいい。

木は生きている。そして、その木を組んであるだけですから、解体してもまた、同じように組み上げることができるように作ってある。その解体をしたときに「なんだ、平成の大工さんはこんな仕事をしていたのか」と、笑われるようなことだけはしたくない。そう思ってただ一生懸命やっているだけですね。ものを作るときに嘘や偽りのないものを残しておくということです。そのような毎日の営みをぼちぼちと少しずつ続けています。それしかないですね。

的川泰宣 (まとがわ やすのり)
宇宙工学者　1942年生まれ。東京大学宇宙航空研究所を経て、現在に至る。大学院時代より科学観測ロケットや人工衛星の飛翔計画の策定に従事し、人工衛星打上げ用ロケットの設計に携わる。「宇宙教育の父」と敬愛される教育・普及活動の第一人者。近著に『「はやぶさ」物語』(NHK生活人新書)ほか多数。

小川三夫 (おがわ みつお)
宮大工　1947年生まれ。法隆寺宮大工の故西岡常一棟梁の唯一の内弟子。1977年徒弟制を基礎とした寺社建築専門の建設会社「鵤工舎」を設立。弟子の育成とともに、国土安穏寺、国泰寺ほか全国各地の寺院の改修、再建、新築等にあたる。著書に西岡棟梁の聞き語り『木のいのち木のこころ(地)』(草思社))など。

【特別ワークショップ】木を削る・木に学ぶ・木に祈る

小川　三夫　宮大工

世界最古の木造建築である法隆寺を仕上げた槍カンナ、ふだん宮大工が使っている平カンナ。ヒノキ、ヒバ、クスノキなど寺社建築に用いられる

木を実際に削って見せてくれて、参加者も試しにカンナをかけさせてくださいます。ワークショップの間にはカンナの歴史、木の使われ方、道具とのつきあい方、研ぐことにかける情熱、宮大工の奥深い心と技のお話を聞かせてくださいました。

小川　西岡棟梁の最初の教えは「これから一年間は新聞テレビ、ラジオ、仕事の本などに一切目を触れてはいけない。仕事の刃物研ぎだけを一生懸命しなさい」ということでした。帰ったら納屋に入って、毎日刃物研ぎです。それから三ヶ月位して、西岡棟梁が納屋に上ってきてカンナを引いてくれた。それは向こう側が透けて見えるカンナ屑でした。それをもらって、窓に貼って、そのようなカンナ屑が出るまで毎日研いでは削りを練習するんですね。よく切れる道具、使いやすい道具は嘘つかないんですな。一番大切でしょうな。だから若い連中も、時間があれば刃物を研いでるんでしょうな。うちの弟子たちはだいたい夜中の二時くらいまで刃物を研いでいます。まず自分で自分の使いやすい道具を作る。それができると、嘘いつわりの無いものを作れることになります。

協力　財団法人・竹中日本大工道具館

研ぐのに三年かかる槍カンナに挑戦。普段は使わず五百年以前の建物復元だけに使う特別なカンナ。

お弟子の斉藤さんが子供たちにていねいに平カンナの引き方を伝授してくれました。

ヒノキは伐採して二百年くらい強くなり、千年かけて弱くなっていく。法隆寺が千三百年もつ理由也。

「奈良辺りの建物は柔らかくやさしく見える。槍カンナの削り肌がさざ波を打ったように削れるからです。」